

学力向上市町村教育委員会プラン研究事業

「研修を通して」

朝日町立朝日中学校 教諭 三井 昭

研修主題「主体的に学び合い、考えを深める生徒の育成」を目指し、「書く活動」「話し合い活動」を生かして学力を向上させることにより、自分に誇りや自信をもたせることなどに焦点を当てて研修を進めてきた。

今年度は3月11日に起こった東日本大震災やそれに伴って起こった福島原発の事故の影響が色濃く残る中で始まった。北信越新人大会や全国選抜大会なども相次いで中止され、影響を実感せざるをえなかった。自分には何ができるか、生徒には何をさせればよいか、震災の意味をどう伝えればよいか、「生きる」の意味が問われている時期に学力向上研修をどのようにとらえて取り組むべきかなどと考えさせられた。今、私たちにできることは、10年後、20年後に活躍する人材を育成することではないかという結論に至った。教員が一致団結して、授業や生徒会、部活動において「生徒の力」を高めるために取り組んだ。

学力向上実践研究拠点校の2年目ということで、昨年同様に「話し合い」という切り口で、学習課題や発問の工夫に焦点を当てて研究するグループと、授業形態の工夫に焦点を当てて研究するグループに分けて授業研究をしてきた。仮説を検証するために全員が互見授業を行った。互見授業に参加するとき「研修意見カード」を準備し、授業をする教員は4つの仮説の中から自分が焦点を当てたいものを選び、「学習形態」「発問・学習課題」の視点で評価の観点を設定し、参観者はその観点について自由に意見を書き加えて「研修意見カード」を渡すことにした。昨年度は普段見ることができない他教科の授業を見ることにより、気づかなかった生徒の姿が分かり、前向きに研修に取り組んだという成果があげられたが、2年目ということで、新鮮味が薄れたことや行事の準備や、校務分掌や学級事務など日常の煩雑さで互見授業に参加する教師がやや減ってきた。

そこで、マンネリを打破し、今後の研修の方向づけをするために、国立教育政策研究所主任研究官山森光陽先生を2度招いて、指導を受けることになった。1度目は、研修組織の分け方、研修主題と評価規準の関係、授業と研修主題解明との関係、学習形態と学力の関係、指導案の効果的な書き方など、私たちが曖昧模糊とした状態にあったことに一挙に指針を与えてもらった。それをもとに2度目にそれぞれの部会で指定授業を行った。しかしこれですべてが解決したわけではない。研修に対しては温度差があることは否定できない。研修の成果は私たちの技術的、精神的なレディネスがあること、学ぼうという意欲があることが必要条件と思われる。

生徒の学力向上は、教師の授業力向上がなくしてありえないはずである。しかし学力向上も授業力向上も学ぼうという意欲がなくしてはありえないはずである。「授業力向上」＝「生徒の学力向上」であるということを改めて認識して取り組まなければならない。来年度は生徒も教員も意欲をもって取り組めるような研修を考えていかななくてはならない。

